

自己実現を目指す生徒の育成とその支援の在り方

—学習支援ボランティアBBSとの連携による個別学習支援を通して—

山口 豊一（跡見学園女子大学）

武居 幸雄（石岡市立府中中学校）

—研究の概要及び索引語—

本校では、自己実現を目指す生徒を育成するため、生徒一人一人の援助ニーズに応じた生徒指導の実践に取り組んできた。本研究では、特別な援助を必要とする生徒に対して学習支援ボランティアBBSをチーム援助のメンバーに交え、生徒の発達課題や生育歴等、生徒理解のための情報を収集・分析し、援助案を立てることにした。そして、学習支援ボランティアBBSを交えたチーム援助が、自己実現を目指す生徒を育成するためにどのような影響を与えたかを究明した

索引語：発達課題 生徒理解 チーム援助 学習ボランティアBBS

1 研究の視点

「生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導」（平成15年6月国立教育政策研究所生徒指導研究センター）では、生徒指導の充実改善を図るため、次のような3つの視点をあげている。一つ目は、青少年を取り巻く社会環境の変化を視野に入れた社会的自己指導能力の育成、二つ目は、学校における生徒指導体制・相談体制の充実改善を図る開かれた生徒指導の確立、三つ目は、問題行動等の予防や解決、健全育成を推進するネットワークと行動連携の実現である。これらは、最近の問題行動の背景に児童生徒の発達課題の未達成や家庭環境（生育歴）などが加わって、学校だけでは対応できない少年犯罪や不登校等が増加していることを意味している。

本校においても、不登校、校内暴力、器物損壊、バイクの無免許運転等、学校不適応行動（以下「不適応行動」という。）の増加が深刻な問題となっている。それらの要因を分析してみると基礎学力の不足、耐性の不足、社会性の欠如、規範意識の低さ、そして自己中心性などによる自立の遅れが要因となっていることが考えられる。

そこで、生徒一人一人の援助ニーズにあった指導・援助を実践するため筑波大学教授石隈利紀氏の提唱する学校心理学の考え方に基づき、不適応行動にある生徒の発達段階や心理的要因等、生徒理解のためのアセスメントを十分に行いながら学習支援ボランティアBBSとの連携を通して、自己実現を目指す生徒の育成とその支援の在り方を研究することが、不適応行動の解消につながるのではないかと考える。

ところで、ハヴィガーストは、「発達課題は、個人の生涯にめぐりくるいろいろの時期に生ずるもので、その課題を立派に成就すれば個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば個人は不幸になり、社会で認められず、その後の課題の達成も困難になってくる。」と述べている。児童・生徒の現状は、発達課題の達成に向けて試行錯誤の経験が少なく、各発達段階に

おける課題達成が困難にあるのではないかと考えた。そこで、生徒一人一人の支援をしていくためには、それぞれの時期の発達段階の特徴を理解し、発達課題がどこまで達成されているかを明らかにすることが重要であると考えた。一方、エリクソンは、人間の発達段階を8つに分け、それぞれ重要な課題とそれが達成できなかった場合の葛藤と危機について述べている。現代の少子化進行は、家族構成、住居や経済状況など生活のリズムに大きな影響を与えている。さらに、個人や家族の孤立化を生み近所付き合いなどありふれた日常生活の中で人間関係の形成を難しくさせていると考えられる。このような生活環境の中で成長している子どもたちにとって、発達課題を達成することは容易でないばかりか、課題そのものが変化しているとも考えられる。そこで、生徒のこれまでの生育歴に関する情報を収集し、それらの内容をチーム援助の

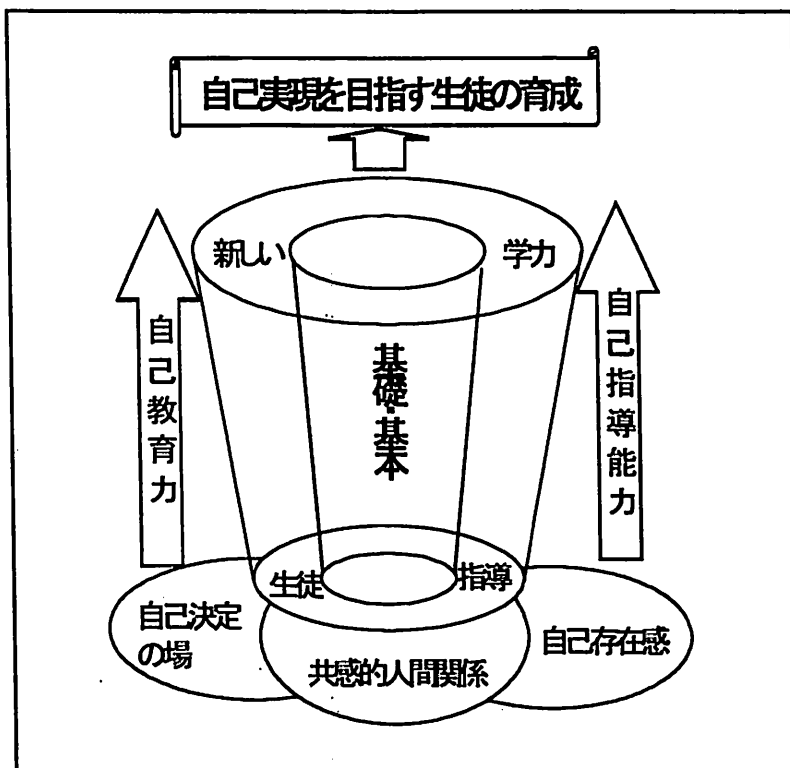


図1 研究の全体図

中で生かしながら指導・援助を進めていきたいと考えた。

生徒指導は、「一人ひとりの生徒の個性の身長を図りながら、同時に社会的な資質や能力を育成し、さらに将来において社会的に自己実現できるような、資質・態度を育成していくための指導・援助」（文部省 1988）と定義されている。さらに、今回の学習指導要領では、推進すべき学校教育において、自己教育力の育成と、個性を生かす教育の推進が強調されている。そこで、図1に示すとおり、自己実現を果たす資質として、生徒に自己存在感を与える、共感的な人間関係を育成する、自己決定の場を与えるの3つを生徒指導の基盤に基礎・基本を中心として各教科の指導を行うことで最終的には児童・生徒の自己実現を図ろうと考えた。

2 研究の目的

学習支援ボランティアBBSとの連携による個別学習支援を通しながら、自己実現を目指す生徒を育成するための支援の在り方を究明する。

3 研究の方法

本研究は、学校心理学(礪,1999)の考え方にに基づき、生徒の求める援助の程度に応じて、すべての生徒を対象とする援助(一次的援助サービス)、一部の生徒を対象とする援助(二次的援助サービス)、特定の生徒を対象とする援助(三次的援助サービス)の3段階に分け、それぞれの援助ニーズに応えることができるようにした。そのためまず、生徒理解のための意識・実態調査を行い、学習面、心理・社会面、進路面、健康面、

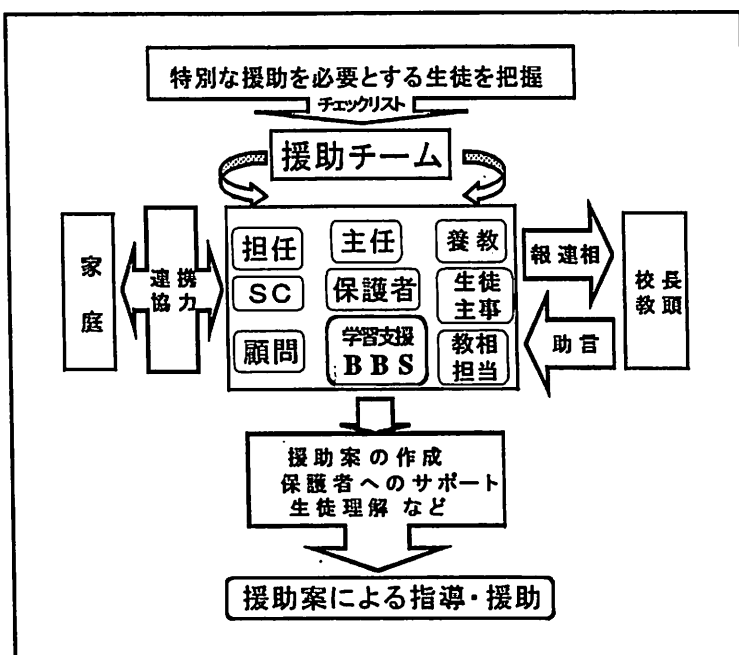


図2 府中中援助チーム

その他の5領域から情報を収集し、分析した。これらの情報を基に援助を実践し、二次的・三次的援助サービスを必要とする生徒に対しては、不登校対策委員会や援助チーム(複数の教師やスクールカウンセラーなど、あらゆる援助資源となるメンバーで構成)を編成し、援助案を立て、検討を繰り返しながら指導・援助を行い、分析する。

4 研究の実際

(1) 生徒理解のための意識・実態調査

生徒の学習面、心理・社会面、進路面、健康面、その他の5領域から表1のように生徒理解のための意識・実態調査(府中式 SOS チェックリスト)を行った。選択肢は、「はい」「いいえ」とし、SOS項目の選択総数が10以上の生徒を二次的・三次的援助を必要とする生徒ととして捉えた。

学習面に関する項目からは、授業中眠ることが増えていると回答した生徒が各学年ともおよそ40%と、多いことが分かる。第1学年では、期末テストの成績が下がって不安に感じている生徒が多いことから、学

表1 生徒理解のための意識調査

学 習	1	授業中ぼんやりすることが増えている。
	2	期末テストの成績が下がった。
	3	授業中眠くなるが増えている。
	4	授業中集中できない。
心 理 ・ 社 会	5	自分は「だめだ」と思うことが多い。
	6	学校生活が楽しくない。
	7	イライラすることが増えている。
	8	一人であることが多い。
	9	保健室へ行く回数が増えている。
	10	服装や言葉遣いが汚れている。
進 路 健	11	得意なことがある。
	12	進路や将来がとても心配である。
康	13	何となくだるい日が続いている。
	14	食欲がなくなった。
	15	けがや病気をしている。
	16	健康に自信がない。
そ の 他	17	家の人とあまり話をしない。
	18	家の人に注意されることが増えた。
	19	遅刻や早退をするようになった。
	20	理由がなく欠席したくなる。

習に対する意識が非常に高いと思われる。

心理・社会面に関する項目からは、「学校生活が楽しくない」と回答した生徒は少ないものの、自分は「だめだ」と思うことがあるやイライラすることが増えているなど自己肯定感の低い生徒や耐性力の低い生徒が第1学年と第2学年で多いことが分かる。服装や言葉の乱れていると回答した生徒は少ないが、教師の立場から見ると現状との差がかなり感じられることから自己管理能力や自己指導能力が十分身に付いていないと考えられる。

進路面に関する項目からは、将来に対する不安を多く抱えている生徒が多い。

健康面からは、何となくだるい日が続いていると回答した生徒や健康に自信がないと生徒が学年が上がることに増えている。

その他の項目からは、理由がなく欠席したくなる生徒が、学年が上がることに増えている。

これらの結果から、本校における不適応行動の背景には、学習意欲の低下や自己肯定感、自己存在感の低さが関係しているととらえた。エリクソンは、「学童期までに、基本的信頼感・自律性・自主性が育っておれば、『勤勉性』を身につけることができるが、育っていなければ『劣等感』をもってしまう。」述べている。

また、下山（1998）によれば「勤勉性とは、自らの能力を発展させ注意深さや忍耐強く仕事を完成させる喜びである。」と述べている。私はこの勤勉性を、困難なことに取り組み、問題を解決していこうとする力ととらえた。さらに、やまだようこ（1998）は、生涯発達心理学の立場から両行モデルを提

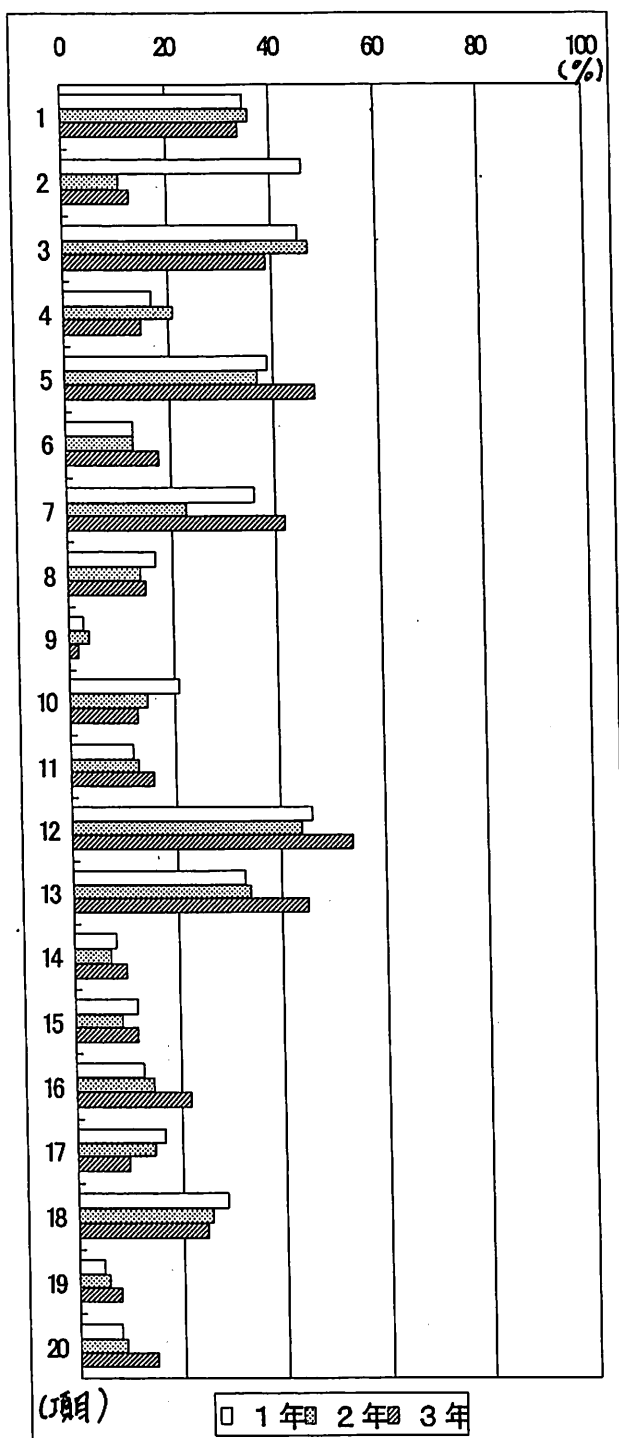


図3 生徒理解のための意識調査
(平成15.12.15実施 府中学校539全校生徒)

唱し、「人間の発達段階を獲得・成長だけでなく、喪失・衰退も含めて多面的にとらえる。」と述べている。

これらの考え方を基に、本校における不適応行動の要因について考えた時、エリクソンによる児童期までの発達課題の未達成は、不適応行動への誘因の一つとしてとらえた。特に、児童期の課題である「勤勉性」が達成されておらず、「劣等感」をもつことが自己肯定をできず悩みや不安を深刻化させ、青年期の発達課題の習得を困難にしている。そして、これらの生徒を特別な援助を必要とする生徒としてとらえ、自己実現を目指すための指導・援助の必要があると考えた。

図4は、SOS項目の選択合計数である。全体的には、合計5以下に多くの生徒が集中していることが分かる。本調査においては、選択項目数が10以上の生徒（第1学年15人、第2学年9人、第3学年16人）を特別な援助を必要とする生徒としてとらえた。さらに、生徒指導部会で追跡調査を行ったところ、選択項目数と生徒の不適応行動間には選択項目数の多い生徒ほど不登校・暴力行為・夜間徘徊などといった不適応行動が深刻になっていることが分かった。

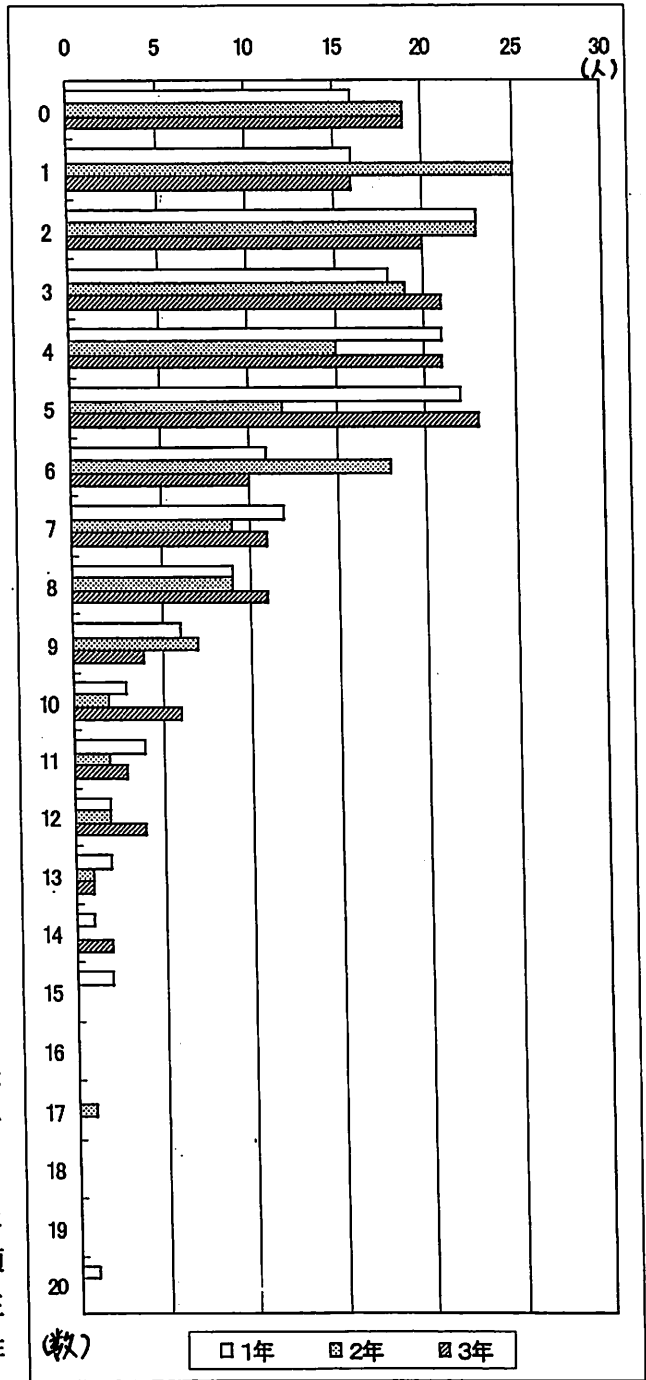


図4 SOS選択総数の分布

(2) これまでの主な取り組み

(平成15.12.15実施 府中中学校539全校生徒)

① すべての生徒に対して（一次的援助サービス）

- ア「読み・書き・計算」のモジュール学習
- イ構成的グループ・エンカウンター(岡,1992)の継続的な実施

② 一部の生徒に対して（二次的援助サービス）

- ア 英語・数学の少人数指導
- イ「ピアカウンセリング」のスキル演習

ウ「スクールカウンセラー」による希望生徒を対象とした傾聴訓練

③ 特定の生徒に対して（三次的援助サービス）

ア 個別学習室の開設

イ 援助チームの編成

ウ 関係機関（茨城県少年サポートセンター・児童相談所等）との連携

(3) 平成15年度の取り組み（学習支援ボランティアBBSによる個別学習）

① 導入のねらい

平成12年度から配置されたスクールカウンセラー（以下「SC」という。）と連携しながら、特別な援助を必要とする生徒の悩みや不安を受け止め、学校生活への適応能力の向上が図れるよう努めてきた。その結果、これらの生徒の多くが、学習や進路への不安を起因とする自己肯定感や自己存在感の低さが不適応行動の要因となっていることが分かった。

そこで、これら生徒の自信を回復させることで学校への適応能力を高め、学校全体の活力の向上や秩序の維持を目的とした。

② 対象生徒

意識調査（府中式SOSチェックリスト）から不適応行動が著しいと判断される生徒の中で、個別の学習支援を希望する生徒。

③ 学習支援の流れ

学習支援は予約制とし、生徒・保護者の要請及び不登校対策委員会や援助チーム会議において個別の指導・援助を必要とすると判断した生徒に対し保護者の了解を得て、実施する。

④ 学習支援の依頼先及び活動時間

BBSは、Big Brothers and Sisters Movementの略で、様々な悩みをもつ子どもたちに兄・姉のような立場で接し、日々の悩みや喜びを分かち合ったり、相談にのったりしながら、少年が自分自身で問題を解決していく力をつけていくための法務省保護局管轄の大学生を中心とするボランティア団体である。

BBS会

BBS (Big Brothers and Sisters Movementの略) は、少年たちの兄・姉のような身近な存在として良き話し相手・相談相手・遊び相手となりながら、少年の健全な成長を側面から支援する「ともだち活動」を行っているほか、犯罪や非行のない地域社会の実現をめざした非行防止活動も行っています。全国に約6,100人の会員があり、現代をともに生きる若者同士であるという共感と、そこから生まれるボランティアの精神によって支えられています。

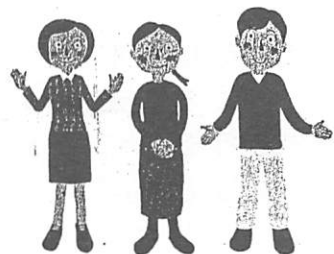


図5 保護監察局リーフレット（ともに手をとって）

本校では、平成15年度から毎週木曜日午後2時～5時の間、4名の大学生が来校し、二次的・三次的援助を必要とする生徒に対して心の相談や学習支援を行っている。現在10名程度の生徒が定期的に活用して

いる。

⑤ 連携上の留意点

ア 学習支援ではあるが、教育相談的な要素も含まれるため、プライバシー保護から守秘義務を徹底させる。BBSメンバーの住所や電話番号は教えない。学校外での個人的な活動は行わないことを申し合わせた。

イ 生徒への指導・援助の内容については、不登校対策委員会及び援助チーム会議の中で情報交換を行い、SCと教員が適宜サポートする。

また、BBSの勤務日以外については、教育相談担当教師を中心に個別学習室を運営していく。

⑥ 活動内容

ア 基礎基本的な学習内容

の定着と自分の特徴にあった学習方法を身につけるための援助が主な目的である。

イ メンタルヘルス的な役割
教師やSC・親・友人にも打ち明けられない不安や悩みを話し出しやすいような雰囲気作りに留意し、生徒との信頼関係作りに努めるようにする。但し、参加する大学生には事前に活動内容や個々の生徒に対する留意点について打ち合わせを十分に行ってから学習支援に参加してもらう。

表2 BBSとの確認事項

BBSのみなさんとの確認事項	
1	参加する生徒の多くは、何らかの問題行動を抱えている生徒です。決まりやルールを守れない生徒には、「仲良くなる」と「甘えやわがまを許す」との違いを意識して指導・援助してください。
2	おしゃべりや遊びを求めて来室する生徒もいます。一人一人の援助案については、BBSのみなさんと担当教員・SCと事前に協議しますが、対応に迷う場合は、気軽に声をかけてください。
3	基本的な学習習慣が身につけていない生徒がいます。学習教材は、各自能力にあった内容を教師が用意します。少しでもできるようになったら「できたね。」など励ましの言葉をかけてあげてください。自尊心の低い生徒が多くいます。
4	中学生は、子供と大人の両面を持ち合わせています。個として尊重し、丁寧な言葉遣いで接してあげてください。
5	学習内容や気になったことについて記録をお願いします。これは、担任の教師が今後の指導に生かしたり生徒の変容の様子を知るために必要です。
6	活動終了時は、現状復帰に気をつけてください。物の紛失や器物損壊などの確認をお願いします。

表3 学習支援までの経緯

取り組みの経過	
<平成14年度>	
2月	○学習ボランティア先進校視察 ・東京都葛飾区立葛美中学校
3月	○水戸保護観察所訪問 ・BBS担当保護観察官との協議 ○BBS会長との打合せ ○BBS学習会参加 ・水戸青少年会館
<平成15年度>	
4月	○BBS学習会参加 ・水戸青少年会館
5月	○BBS学生登録者との打合せ ・学生担当大学教員との打合せ ○学習支援開始 (以後、月1回定例学習会を実施)
10月	○石岡地区保護司会代表者BBS視察
11月	○石岡ロータリークラブより運営資金援助
12月	○BBS・学校職員・SCとの情報交換会 ○石岡地区保護司会BBS支援のための「中学校との連携プロジェクトチーム」(仮称)発足

5 研究の結果と考察

(1) 不登校生徒に対して効果があったと思われる事例（中3 女子A子）

A子は、家庭内の不和と友人関係のトラブルから、家庭内暴力や自傷行為を繰り返し、第2学年9月から不登校となった。SCによるカウンセリングを定期的に受けながら相談室登校を続けたが、第2学年3学期から月に3日程度しか登校できなくなった。第3学年4月援助チーム会議で協議し、5月より、学習支援をはじめた。

① 学習支援の際行った工夫や留意点

アAさんの情緒不安定に関しては、SCから専門的なアドバイスを受けながら指導・援助していくことにした。

イ保護者との行動連携を密にとり、何か心配な言動があったときは担当職員とすぐ連絡を取るよう確認をした。

② A子の変容

A子は、現在定期的に相談室登校が続けられるようになり問題となるような言動はほとんど見られなくなった。A子は、児童期の発達課題である「勤勉性」と「劣等感」の試行錯誤が少なく、そのため友人関係のトラブルや家庭内の不和という困難を乗り越えていこうとする力が足りなかったと考えられる。今回、相談室をA子の「心の基地」として居場所を確保し、情緒不安定なときは、その都度心の整理をつけさせるよう援助をしたことやBBSの学習支援を受けることで自己の存在感や自己決定の場を確保したことが本人の自己肯定感を高め、進路という人生の壁を乗り越えようとする力が備わったと考えられる。

表4 中3 A子への指導・援助

○学習の内容 ◎気になったこと

◎A子の変容☆教師による指導・援助

BBSの指導・援助の記録	A子への指導・援助の経過
<p>5/22</p> <p>○ 数学のワーク（整数の計算・少数の計算）をやりました。前半は、おしゃべりが中心になっていましたが、後半は、「これでいいの。」と確認しながら学習していました。</p> <p>◎ 特に問題行動を抱えているようには、見えませんでした。初対面の私に家庭内のもめごとについて話しをしてくれました。漫画や映画の話して盛り上がりました。</p> <p>6/5</p> <p>○ 「朝の6時に寝た。」と言っていました。とても眠そうでしたが、集中して数学のワーク（分数の四則計算）をやりました。</p> <p>◎ お花をもらいました。漫画の話やお兄ちゃんが自分の理解者だが、他県で暮らしているため会えないことなどを話してくれました。分数の計算ができるようになったことにとっても喜んでいました。</p> <p>6/26</p> <p>○ 遅刻してきました。とても落ち込んだ様子でしたが、勉強（正の数・負の数）はしっかり頑張っていました。</p> <p>◎ とても調子悪そうなので声をかけましたが、「受験するから頑張るんだ。」と言って頑張っていました。何かあったのでしょうか。唇の辺りを怪我していました。</p> <p>7/3</p> <p>○ 学習内容が難しくなってきたため「う～ん」と考え込</p>	<p>○ 相談室へ登校し、精神的に安定はしているが、学習への意欲は低い。相談室登校では、担当教員と話しをしたり絵を描いたりして過ごしている。</p> <p>☆ 登校させることを第一の目標とし、対応プログラムを作成した。また、BBSによる学習支援を受けることで学習への自信をつけさせ自己肯定感が高められる配慮した。</p> <p>○ BBSとの交流により、相談室へも定期的に登校できるようになった。学習に対しても「問題集を紹介してほしい。」など前向きな姿勢が見られるようになった。</p> <p>☆ 無理をさせないよう配慮し、相談室登校の時は、今まで通り相談活動を重視した。</p> <p>○ 6月後半から7月にかけて父親とのトラブルから精神的に不安定になる。家庭で自傷行為や器物損壊といった行動が見られるようになった。しかし、BBSとの学習会がある日は、必ず登校し学習する姿が見られた。</p>

<p>むことが多くなりました。けど、丁寧に教えてあげるととても嬉しそうな顔をして「分かった。」と言っていました。</p> <p>◎ブラウスの袖に血が付いていました。特に聞きませんでした。イライラしているようだったのでおしやべりに切り替えましたが、「大丈夫です。」と言って勉強していました。</p> <p>7/17</p> <p>○整数と負の数の四則混合計算をやりました。最近、勉強ができるようになりたいという気持ちを強く感じます。質問も積極的でした。</p> <p>◎全校集会と登校時間が重なってしまい、先生が連絡してくれなかったことに対して怒っていました。でもしばらくすると気分を切り替えて勉強に集中していました。</p> <p>9/7</p> <p>○久しぶりでした。夏休み英語の勉強をしたと言っていました。一次方程式をやりました。</p> <p>◎勉強には、あまり集中できなかったようです。「文化祭に絵を出品するんだ。」と気合いが入っていました。</p> <p>10/9</p> <p>○勉強への意欲が下がってしまったようです。一次方程式をやりました。</p> <p>◎ジャージで登校しました。何か勉強に対して集中できないらしく落ち着かない様子でした。</p> <p>11/6</p> <p>○再び学習への意欲が沸いたようです。累乗の乗法計算をやりました。高校入試問題についていろいろと聞かれたのでアドバイスしましたが詳しいことは先生に相談しよう話しておきました。</p> <p>◎担任の先生は「決して怒らずやさしい。」と言っていました。親やお兄ちゃんに誉められたいから勉強を頑張ると話していました。</p> <p>12/18</p> <p>○英語と数学の勉強をやりました。とても意欲的態度でした。</p> <p>◎祖父が亡くなった事を話してくれましたが、とても元氣そうなので安心しました。「来年もよろしくお願ひします。」と言って帰っていきました。</p>	<p>☆親及びBBSと行動連携を密にとるとともに、SCからも助言をいただき指導・援助を行った。</p> <p>○登校してもイライラすることが少なくなり、学習に集中できるようになった。</p> <p>☆夏休みを利用し、担任・教育相談担当の教師・友人とともに美術館へ出掛けたり学習支援を行ったりした。</p> <p>○目標とする高校進学への不安が募り、イライラすることが多かった。「自分はだめだ。」という思いから学習への意欲が低下してしまっていた。</p> <p>○SCとの面談をすすめたところ「やってみよう」と言い出し、カウンセリングを受ける。</p> <p>☆SCとの面談を再開させることで精神的な安定を図ろうと考え保護者及び本人にすすめた。</p> <p>☆進路に関しては、担任が中心となり指導・援助を行った。</p> <p>○精神的に安定した日が続く、祖父の死に対しても肯定的に捉え、前向きに生活を送ることができるようになった。</p> <p>☆BBS・SC・担当教師との情報交換会を開き、今後の指導・援助の方針について協議した。</p>
---	---

(2) 暴言を繰り返す生徒に対して効果があったと思われる事例(中2男子A男)

A男は、入学時から落ち着きがなく授業中出歩いたり教師に指導されると暴言を吐いたりするなどしていた。また、友人関係においても自分よりも弱い者に対して嫌がらせをしたり命令するなどの行動が見られた。生育歴としては、家庭生活や学校生活の中で認められることが少なくA男は暴力的な行為を繰り返すことで周囲の注目を集めようとしていたようである。問題行動があった場合は、その都度相談室で指導を繰り返してきたが、基礎学力の未定着もあり、第2学年9月より学習支援をはじめた。

表5 中2 A男への指導・援助

○学習の内容 ◎気になったこと ◎A男の変容 ☆教師による指導・援助

BBSの指導・援助の記録	A男への指導・援助の経過
<p>9/7</p> <p>○数学の計算問題をやりました。基本的な整数の四則混合計算ができないようです。今やっている一次関数の問題を持ってきましたが、正の数負の数の計算をやりました。</p> <p>◎自分の意志で来室しているようには見えませんでした。話しかけても「うん」と答えるだけでした。できた問題に対して「できたじゃん。」と声をかけても無反応だった</p>	<p>○友人や特定の教師に対して暴言を吐いたり暴力的な行為を繰り返すなどの問題行動が目立った。</p> <p>○学習への意欲に欠け、授業中居眠りをしたり授業の準備をしなかったりすることがあった。</p> <p>☆学力の保証をすることを目的に、BBSに</p>

<p>のでちょっと寂しかったです。とても大きな問題を抱えているように思います。</p>	<p>よる学習支援を受けさせることで自信をつけさせ自己肯定感が高められる配慮した。</p>
<p>10/23 ○ 計算力がついてきました。これまでに学習した内容は、確実にクリアーしていると思います。1年生の数学の総合復習問題をやりました。 ◎ 相変わらず無表情です。問題ができたときや嬉しいことがあったときは自分を誉めてあげることも大切だよと言っておきました。少しだけ笑顔を見せてくれたのでホッとしました。</p>	<p>○ 学習会への参加に対しては、嫌がっていないが、大きな変容は見られなかった。 ☆ 生徒指導主事との面談を通しながら、BBSとの学習支援をすすめた。保護者とも情報交換をしながら生活日記をつけさせ、基本的な生活習慣の定着に努めた。</p>
<p>11/6 ○ 1年生の数学の内容は、クリアーです。自分から「これどうやるの。」と質問してくれるようになりました。 ◎ 会話が成立するようになりました。「ここはこうやるのよ。」と言うと「あっ、そうか。」という程度ですが笑顔も見せてくれるようになったことはとても嬉しいです。</p>	<p>○ 授業への取り組みが積極的になり、居眠りをするのがなくなった。教師への暴言もほとんどなくなったので、今後は友人とのトラブルが課題である。 ☆ BBS・担任・生徒指導部と今後指導方針について協議を行った。</p>
<p>11/20 ○ 家庭でも勉強するようになったと言うことで数学に関しては、飛躍的に伸びていると思います。授業でやっている内容(比例・反比例)に迫ってきました。私自身、予習してこないとちょっと厳しくなってきました。 ◎ 生徒指導の先生と家庭で勉強する約束をしたことや部活動のことについて話しをしてくれました。自分に自信が持てるようになったのか生き生きとした感じを受けました。</p>	<p>○ 期末テストの成績が飛躍的に伸び、本人は大喜びしていた。学級内においてもトラブルは少なくなり、各活動にも意欲的に取り組むようになった。 ☆ 生徒指導主事から成績が伸びたことや学校生活を安定して送ることができるようになったことを誉めて励ました。</p>
<p>12/18 ○ 今日、文章題が苦手だということで方程式の文章問題をやりました。途中、私も上手に教えられなかったので武居先生や遠藤先生のお力を借りてしまいました。 ◎ 期末テストの点数があがったことをとても自慢そうに話してくれました。もともとはとても勉強のできる生徒ではないでしょうか。</p>	<p>☆ 家庭との情報交換の中で本人の自己肯定感が高まるよう「だめなことはだめ」「よいことはよい」と叱ったり誉めて励ましたりするよう助言した。</p>

① 学習支援の際行った工夫や留意点

ア A 男の言動から発達課題の未達成な部分が多いと考え、小学校との情報交換や保護者との面談から得た情報をもとに援助案を協議した。

イ 大学生が女性の場合は、担当職員が1名つき一緒に学習するようにした。

② A 男の変容

学習支援を始めた頃、A 男は落ち着きがなく、暴言を吐くことはなかったが強制的にやらされているという様子がうかがえた。大学生が話しかけてもほとんど返答しなかった。しかし、回を重ねるごとにA 男みずから「今日の先生はだれですか。」などと大学生が来校するのを楽しみにするようになった。また、教師が心配したような問題行動は全くなり、現在は学級においても問題行動は少なくなり、前向きに学校生活を送ることができるようになった。結果としてA 男のテスト成績は、第1学期と第2学期とを比較すると100点以上伸びた。

(3) 参加大学生の感想

① A さん

府中中学校の生徒の関わりは、予想以上に根気や忍耐がいきり、最初は、私で力になれるのかと不安でした。しかし、学習支援や悩みの相談を受け

ているうちに、私のことを少しは頼りにしてくれているのかなと思えるようになりました。少年犯罪の背景には、「もっとだれかが話を真剣に聞いてあげていれば」というケースが数多くあります。この活動がその一助となれば幸いです。

② Bさん

学習支援と聞き、家庭教師をイメージしていました。ところが、スタートしてみると、家庭教師というわけでもなく、かといって学校の先生や友達などでもない。とっても不思議な関係が生まれてきて、今はこの関係がとても重要であると感じています。何でも話せる友達であったり、時に勉強を教え、進路相談を受ける先輩であったり、その時の生徒さんの状況に応じて変わっていきける存在だと思えます。私たち学習支援ボランティアだからこそ成り立つ関係、ならばなおさら責任重大。週1回、1時間という短い時間を大切にしていきたいと思っています。

③ Cさん

先生方との学習会の中で「この生徒は、注意をしてください。」などとアドバイスを受けますが、私たちに見せる生徒さんの姿は、どの子も純粹で前向きに学習する生徒ばかりです。小学校時代に教師不信になった生徒、家庭内のことで不安や怒りを感じている生徒など、生徒さんの問題とされる行動の裏には、真剣に聞いてあげなければならぬ重要な心の叫びがあると思えます。という私も、初めは余裕がなくてただ家庭教師のようにしか接することができませんでした。府中中を訪れる度、関わりを持っている生徒達が手を振ってくれたりあいさつをしてくれることで兄・姉のような存在で接することができるようになったと思えます。普段は、犯罪を犯した少年たちへのボランティア活動が多いのですが、実はこういった犯罪を犯す前の防止活動が大切なのではないかと思います。

6 研究のまとめ

自己実現を目指す生徒を育成するため、学習ボランティアBBSとの連携による個別学習支援を通して研究を進めてきた結果、次のことが分かった。

- (1) 学級の中では指導・援助が困難と思われる生徒たちが、大学生との触れ合いを通して、これまでの自己を振り返り、よりよく生きようとする生徒を育成することができた。
- (2) 大学生と勉強することの良さが学習支援を受けた生徒から他の生徒に広がり、大学生に学習支援を受けることが特別なことであり、相談室に行く生徒は問題のある人というイメージが払拭された。結果として、相談室(教員によるもの)を利用する生徒が増加した。
- (3) 教員・SC・BBSとの情報交換を定期的に開くことで行動連携が密になり生徒への指導・援助が多角的多面的に行うことができた。また、大学生の生徒に対する真摯な対応が教師への刺激となり、教員一人一人が生徒指導に対して共通意識を持って教育実践ができるようになった。

(4) 学校とBBSとの連携を保護者や地域に情報公開することで、子どもたちを多くの大人や地域が育てていこうとする意識が芽生えた。特に、石岡地区保護司会や石岡地区ロータリークラブから支援・援助を受けることができ、学校と地域との結びつきを一步前進させることができた。

今後の課題として以下をあげる。

- ① 今後、個別学習を進めていく上で、BBSの勤務時間の不足、費用、人材の確保を行うため、行政や関係諸機関への働きかけを行い、組織的・継続的に実践できるようにしていきたい。
- ② 本研究をさらに進め、触法行為や軽度発達障害等、より専門的な指導・援助を必要とする生徒のため、地域や関係諸機関も含めたサポートチームに発展させていきたい。

※プライバシー保護のため内容は変えてあります。

<文献>

秋山俊夫監修 1993

石隈利紀著 1999

石隈利紀・田村節子著 2003

下山晴彦編 1998

三浦香苗・村瀬嘉代子・西林克彦・近藤邦夫編者 2000

図説生徒指導と教育臨床

学校心理学

チーム援助入門

教育心理学 I・II

発達と学習の支援

北大路書房

誠信書房

図書文化

東京大学出版会

新曜社